

凜々しく ~附属小温故創新~ 2017/12/5 No. 39

原点に戻って、本質をみる

気がつけば12月も5日になっていました。それでも校庭ではまだまだ半袖、短パンの子どもたちの姿が目につきます。最近では長縄をするクラスが多くなってきたようで、時々混ぜて跳ばせてもらいます。驚いたのは1年生の校庭で、男の子たちがボールをもってパスしながら走っていました。週末にあった早明戦の影響でしょうか。楽しそうにボールを持って走っている姿にラグビーの原点を見たような気がしました。

さて、週末と言えば、この週末は算数部のOB会(Σの会)に参加しました。いくつになって「先輩」とお会いするのは緊張します。でも、どの先輩と話をしても、附属小の子どもたちや先生方のことを見守っていただいていることをお聞きし、本当にありがたく思いました。そして、これまでも先輩方が創り上げてきた附属小の文化を大事にしていかなければならない、という思いを強くもちました。何よりOB会の目的が旧交を温めることではなくて、現役の私たちへのエールであることも忘れてはならないことです。

先日、中森元校長先生と、鈴木勝郎先生からお手紙をいただきました。

そこには、合唱の会創設の頃の思いが書かれていました。今年で44回目を迎える合唱の会。その目的について原点に戻って考えることは、合唱の会の本質につながるのではないかと思います。

先週、研究全体会Vが行われ、いよいよ共同研究4年次のスタートです。同時に1月から社会科を皮切りに全校授業が行われます。私は算数部で2度、特活部で2度、13年の勤務で4回全校授業の機会を頂きました。特に算数部時代は部員が4人いたので、なかなか全校授業の機会を頂くことができませんでした。当時は1日で1教科。夜は授業者の学年の先生が音頭をとって、北仙台の「ごんちゃん」へと会場を移動します。授業者は座敷の「忍」の掛け軸の前に座ります。酒席ですが話題は午後の検討会で話し足りなかったことが中心でした。そして、最後は次の教科部へのエールでお開きです。これが全教科ですから、当時の先生方は元気でしたね。

今、思うと全校授業研究会は私たちにとって最大の研修の場であり、しかも夜もセットされていたのは、授業者や教科部への「慰労」だけではなく、大げさな言い方ですが、明日の附属を創るためであったようにも思えます。当時は飲み会も多く、でも飲み会の方が早く帰れる、という不思議な現象も起きていました。

来年度の公開研究会も平成31年の2月に2日間で行うことでまとまりそうです。公開の内容についてはまだ結論が出ていませんが、肝心なのは

なぜ公開を行うのか。

ということに尽きるのではないのでしょうか。

公開の原点に戻って、全員で気持ちを揃えることが求められているように思います。

(文責：副校長 手代木)